

自立した主権者 をめざして

▶ ▶ ▶ Vol.38 「常識」という名の偏見

KEYPOINT

- あなたは社会的な課題について日ごろ考えていますか？
- また、考えていることについてどんな活動をしていますか？

SUMMARY

よく、「差別はなくなる」と言われます。確かに差別を根本的になくすことはできないかもしれませんが、自分たちの意識の持ちかたを変えることで減らしていくことは可能です。特に「無意識の差別」は、今まで自分たちが常識だと思っていたことが実は偏見だったのではないかと見直すことで、行動を変えていくことができるのではないのでしょうか。

お知らせ

(12月1日発行)1面論文について、構成や流れや受け止め方等をコメントする場を YouTube チャンネルで配信しています。毎月配信しますのでニュースと併せてご視聴ください。



震災という非常時に流される「デマ」の正体

元旦に起こった能登半島の地震に関して、ネットでは様々な「デマ」が流れています。例えば町内会に入っていないと、震災時に名簿から外れてしまい、救援物資が受け取れないというもの。他にも、「外国人による窃盗団が集まった」などとする「情報」も流されました。これについて防災心理学の専門家は、「被災地の外に住む人が良かれと思って広めているデマが多い」との見方を明らかにしていますが、デマは、災害対応を遅らせ、人への差別を助長します。デマを流す理由は「愉快犯」であることが多いのですが、多くの人々が犠牲になるような事態のなか、自分の投稿を見てみんなが騒いでいる状況に面白さを感じるといった心理的報酬を得、承認欲求を満たすことが目的のようです。デマの内容は様々ですが、読んだ人が「確かにありそうな話だ」と思いこむような内容は共感を得てしまうため、広く拡散するでしょう。

自己肯定感の低下と無意識の差別との関係

この、「確かにありそうな話」と判断される根拠はどこからくるのでしょうか。実際、私たちは、ただ単に生活をしているだけでも、偏見を持ち、差別をしてしまうことがあります。

偏見による排他的な態度や差別感情は、特定の集団のメンバーについて外部が受ける印象、いわゆる「ステレオタイプ」が大きく影響を与えられていると言っていますが、この「ステレオタイプ」は私たちが物事を判断する際におこる「カテゴリー化」がもとになっているのです。

私たちは、生活の中で男性と女性や、子供と大人。正規と非正規、男性社員と女性社員、障がい者と健常者、日本人と外国人、そして自分の属する集団とそうでない集団というように区別し、状況判断の手掛かりにしています。

人は、外見、行動、声、所属、言語などを手がかりにして、小さい時期からの経験をもとにカテゴリー化をおこなうのです。

このカテゴリー化によって、さまざまな社会の集団に対するイメージ(認知的な傾向)、つまりステレオタイプが形成され、さらにこのステレオタイプに好感、憧憬、嫌悪、軽蔑といった感情が伴ったものを偏見、ステレオタイプや偏見を根拠に、接近・回避などの行動として現れたものを差別と社会心理学では定義しています。

ここで重要なのは、カテゴリー化を行う基軸が「小さい時からの経験」であるということです。アインシュタインは「常識とは、18歳までに身に付けた偏見のコレクションである」と言いましたが、「学校にいけない子は怠けている子」「服装の乱れは心の乱れ」といった科学的根拠のない規範

を子どもの時から耳にし、ある意味押し付けられることで、その価値観が「常識」であると思ひこむようになります。そしてその常識に沿うことができない自分を否定的にとらえてしまう、「通俗道徳のわな」は、そのまま自己責任論に結び付き、やがて自己肯定感の低下をもたらすことになるのです。

自己肯定感が低い状態で自分が属する集団が他者から低い評価を受けていると感じれば、更に自分の評価が低くなってしまいますが（たとえば「ゆとり世代」は競争意識やチャレンジ精神が低いなどという評価）、人は、他者よりも優れていたいと考える生き物ですから、その劣等感を払しょくするために（無意識に）他者よりも優位であろうとするマウンティングを行おうとすることが差別につながるのではないのでしょうか。

自己受容が社会を変えるスタート

無意識に持つ偏見が差別につながるということはわかって、大人になるまでの過程で培われた常識（偏見）をなくしていくことは、容易ではありません。それこそ、自分の行動や判断の基準をリセットしなければならないからです。この偏見をなくするためには自らの思考の偏りに気付かなければなりません、「自分に非がある」というスタートではやはり自己肯定感が低くなりますので、まずは「今よりも成長しよう」と考えるとよいかもしれません。そして自分が成長するために

自分を丸ごと理解する、自分の良いところも嫌なところも受け入れる、「自己受容」をしっかりと行うことが求められます。

なぜなら、自己肯定感、自己受容の上に成り立つものだからです。自分を変化成長させながら、新たな知識を探索する機会をもち続け、失敗したら行動を分析すること（原因が何にあるのかを認識すること）で、少しずつ偏見をなくし、「無意識の差別」を減らしていきましょう。

その際大切なのは個人の努力だけでなく、法律や制度、社会的規範などの枠組みがあることです。ジェンダー平等、人権に重きを置いた政策や社会構造の転換を実現するためには、私達自身が行動することが大事ですが、同時に個人が動きやすい仕組み作りも求められます。

個人で、そして社会全体で変革や新たなものを生み出すエネルギーを養っていくために、まずは自分の偏見に気付くことから始めましょう。

〈機関紙「日本再生」No.535の内容〉

2023/12/01 発行

カオスの世界化の中で衰退途上・日本の再生は可能か ● 3-10 面/コラム/一灯照隅 ● 10-11 面/総会報告 ● 12-16 面/インタビュー/トランスジェンダー差別と人権/高井ゆと里・群馬大学准教授 ● 17-24 面/囲む会 in 京都/二つの戦争を抱える世界/中西寛・京都大学教授
※ 機関紙「日本再生」のご購読をご希望の方は下記の連絡先までご連絡ください。

一緒に
考えてほしいこと

- ・あなたは自分の常識を疑ったことがありますか？
- ・差別のない社会はどうしたら実現すると思いますか？

【連絡先】「がんばろう、日本！国民協議会」埼玉読者会

住所：埼玉県越谷市大里 226-1 白川ひでつぐ事務所

担当：吉田理子

ganbarou.r.a.saitama@gmail.com

がんばろう、日本！HP 埼玉読者会 note



がんばろう、日本！国民協議会は、「国民主権の発展」「人づくり」「がんばる日本と日本人を回復する国民運動」「自由・民主」東アジアの社会的リーダー層のネットワーク構築および日米同盟の再定義を目的として活動している団体です。機関紙「日本再生」および各種資料の発行や、例会、定例講演会などの開催、また国民的課題、地域的課題への取り組みなどを行っています。